

にそれらの情報を付加可能.

4) 治療計画装置 (BrainSCAN) : IMRT をはじめ色々な治療計画が可能となっている.

当科では昨年7月より稼働を開始し本年4月末までに体幹部治療を97例に行った. 肺腫瘍の治療は74例, 肝腫瘍は23例であった. 再照射例を除き, また2ヶ月以上の経過観察が可能であった症例を対象に解析を行い, 肺/肝それぞれ70/20例であり, 奏効率は86/85%であった. 1アークでの治療を基本としているが grade 2 の放射線性皮膚炎の1症例を除き, grade 2 以上の有害事象は認めていない. 肺病変については4月末時点で局所制御率は100%である. 肝腫瘍に対しては徐々に線量アップを行い可能な部位には肺腫瘍と同じ線量を現在では用いている.

15 複数回のガンマナイフ治療を施行した転移性脳腫瘍症例の検討

佐藤 光弥・森井 研・秋山 克彦
五十川瑞穂*

北日本脳神経外科病院脳神経外科
新潟大学脳研究所脳神経外科*

ガンマナイフ治療は, 1回の照射で頭蓋内疾患を制御する治療方法として普及した. しかし, 転移性脳腫瘍の場合には, 再発に対して複数回の治療も可能であることが, 通常的全脳照射と比較して利点になっている. 当施設での現状と効果や問題点について検討した. 2006年5月31日まで, のべ1,429例の転移性脳腫瘍にガンマナイフ治療を施行した. そのうち複数回の治療を受けたものは239例であった. 複数回の内訳は2回が175例, 3回が47例, 4回以上が17例であった. 初回治療時の腫瘍縮小効果が明らかで, QOLの維持に有用であった症例が複数回治療の適応となっている. 複数回治療の効果も, 初回治療と同様に期待できるが, 全身状態が進行している場合には, 治療を断念する選択も考慮する必要がある. その決定は, 原発巣を治療する主治医と患者自身とガンマナイフ治療医が十分にコミュニケーションをとってなされるべきであると思われる.

16 早期胃癌におけるセンチネルリンパ節の検討

中川 悟・梨本 篤・藪崎 裕
土屋 嘉昭・佐藤 信昭・瀧井 康公
野村 達也・神林智寿子・田中 乙雄

県立がんセンター新潟病院外科

【目的】早期胃癌におけるセンチネルリンパ節 (SN) の同定および微小転移 (MM) を検討した.

【方法】

1) SN : 早期胃癌80例を対象とした. ICG色素法を用い49例には漿膜側より31例には術中内視鏡により注入し, 着色リンパ節 (GN) を摘出し, GN同定率と偽陰性割合を検討した.

2) MM : リンパ節転移陰性とされたpSM癌38例を対象とした. 全摘出リンパ節をCAM 5.2にて免疫染色し, MMの有無を検索した.

【結果】

1) SN : リンパ節転移は6例に認められた. 平均摘出GN数は3.8個, GN同定率は98.6%であった. リンパ節転移を認めた6例中4例でGN以外に転移を認め偽陰性割合は66.7%であった.

2) MM : 38例中4例 (10.5%) にMMを認めた.

【結語】少数ながら早期胃癌においてもMMは存在する. 偽陰性を66.7%に認めICG色素法によるGN同定法による縮小手術には慎重である必要があると考えられた.

17 Stage IV胃癌に対する姑息切除・減量手術症例の検討

藍澤喜久雄・佐野 文・森岡 伸浩
鳥越 貴行・宮下 薫

燕労災病院外科

【目的】Stage IV胃癌に対する姑息切除・減量手術症例の治療成績を検討する.

【方法】手術的Stage IV胃癌243例中, 姑息切除あるいは減量手術となった159例を検討対象とした.

【結果】肝転移, 腹膜転移のいずれかを有する症例は119例 (74.9%), 両者が陽性の症例は15例 (9.4%) であった. 手術の郭清度はD1以下が88